

CHAPTER 25

ハリーがジニー ウィーズリーとつき合っている。

そのことは大勢の、特に女の子の関心の的になっているようだった。

しかし、それからの数週間、ハリーは噂話など、まったく気にならないほど幸せだった。ずいぶん長い間、こんなに幸福な気持ちになったことがなかったし、幸せなことでも人の口に上るのは、闇の魔術の恐ろしい場面に巻き込まれて噂になるばかりだったハリーにとって、すばらしい変化だった。

「ほかにもっと噂話のネタはあるでしょうに」

談話室の床に座り、ハリーの脚に寄り掛かって「日刊予言者新聞」を読んでいたジニーが言った。

「この一週間で三件も吸魂鬼襲撃事件があったっていうのに、ロミルダ ペインが私に聞くことといたら、ハリーの胸にヒッポグリフの大きな刺青があるというのは本当か、だって」

ロンとハーマイオニーが大笑いするのを、ハリーは無視した。

「何て答えたんだい？」

「ハンガリー ホーンテールだって言ってやったわ」

のんびりと新聞のページをめくりながら、ジニーが答えた。

「ずっとマッチョっぽいじゃない」

「ありがと」ハリーはニヤッと笑った。

「それで、ロンには何の刺青があるって言ったんだい？」

「ピグミーパフ。でも、どこにあるかは言わなかったわ」

ハーマイオニーは笑い転げ、ロンはしかめっ面で睨んだ。

「気をつけろ」

ロンがハリーとジニーを指差して、警告するように言った。

「許可を与えることは与えたけど、撤回しないとは言っていないぞー」

「『許可』？」ジニーがフンと言った。

「いつからわたしのすることに、許可を与え

Chapter 25

The Seer Overheard

The fact that Harry Potter was going out with Ginny Weasley seemed to interest a great number of people, most of them girls, yet Harry found himself newly and happily impervious to gossip over the next few weeks. After all, it made a very nice change to be talked about because of something that was making him happier than he could remember being for a very long time, rather than because he had been involved in horrific scenes of Dark Magic.

“You’d think people had better things to gossip about,” said Ginny, as she sat on the common room floor, leaning against Harry’s legs and reading the *Daily Prophet*. “Three dementor attacks in a week, and all Romilda Vane does is ask me if it’s true you’ve got a hippogriff tattooed across your chest.”

Ron and Hermione both roared with laughter. Harry ignored them.

“What did you tell her?”

“I told her it’s a Hungarian Horntail,” said Ginny, turning a page of the newspaper idly. “Much more macho.”

“Thanks,” said Harry, grinning. “And what did you tell her Ron’s got?”

“A Pygmy Puff, but I didn’t say where.”

Ron scowled as Hermione rolled around laughing.

“Watch it,” he said, pointing warningly at Harry and Ginny. “Just because I’ve given my permission doesn’t mean I can’t withdraw it —

るようになったの？どっちにしろ、マイケルやディーンなんかよりハリーだったらいいの
にって言ったのは、あなた自身ですからね」
「ああ、そのほうがいいさ」ロンがしぶしぶ
認めた。

「君たちが公衆の面前でイチャイチャしない
かぎり」

「偽善者もいいとこだわ！ラベンダーとあな
たのことは、どうなの？あっちこっちで二匹
のうなぎみたいにジタバタのたうってたの
は、どなた？」ジニーが食ってかかった。
六月に入ると、ロンの我慢の限界を試す必要
もなくなっていた。

ハリーとジニーが、二人一緒に過ごす時間が
どんどん少なくなっていたのだ。

O W L試験が近づいて、ジニーは夜遅く
まで勉強しなければならなかった。

そんなある夜、ジニーが図書室にこもり、ハ
リーは談話室の窓際に腰掛けて、薬草学の宿
題を仕上げていた。

しかし、それはうわべだけで、実は昼休みに
ジニーと湖のそばで過ごした、この上なく幸
せな時間を追想していたのだ。

そのとき、ハーマイオニーが、何か含むと
ころがあるような顔で、ハリーとロンの間に座
った。

「ハリー、お話があるの」

「何だい？」

ハリーは、嫌な予感がしながら聞き返した。
つい昨日も、ハーマイオニーは、ジニーは試
験のために猛勉強をしなければならないのだ
から、邪魔をしてはいけないと、ハリーに説
教したばかりだった。

「いわゆる『半純血のプリンス』のこと」

「またか」ハリーがうめいた。

「頼むからやめてくれないか？」

ハリーは、教科書を取りに「必要の部屋」に
戻る勇気がなかった。

その結果、魔法薬の成績が被害を受けた(た
だし、スラグホーンは、お気に入りのジニーが
ハリーの相手だったので、恋の病のせいだと
茶化してすませた)。

それでもハリーは、スネイプがプリンスの本
を没収する望みをまだ捨ててはいないと確信
していたので、スネイプの目が光っているう

”

“ ‘*Your permission,*’ ” scoffed Ginny.
“Since when did you give me permission to do
anything? Anyway, you said yourself you’d
rather it was Harry than Michael or Dean.”

“Yeah, I would,” said Ron grudgingly.
“And just as long as you don’t start snogging
each other in public —”

“You filthy hypocrite! What about you and
Lavender, thrashing around like a pair of eels
all over the place?” demanded Ginny.

But Ron’s tolerance was not to be tested
much as they moved into June, for Harry and
Ginny’s time together was becoming in-
creasingly restricted. Ginny’s O.W.L.s were
approaching and she was therefore forced to
study for hours into the night. On one such
evening, when Ginny had retired to the library,
and Harry was sitting beside the window in the
common room, supposedly finishing his
Herbology homework but in reality reliving a
particularly happy hour he had spent down by
the lake with Ginny at lunchtime, Hermione
dropped into the seat between him and Ron
with an unpleasantly purposeful look on her
face.

“I want to talk to you, Harry.”

“What about?” said Harry suspiciously.
Only the previous day, Hermione had told him
off for distracting Ginny when she ought to be
working hard for her examinations.

“The so-called Half-Blood Prince.”

“Oh, not again,” he groaned. “Will you
please drop it?”

He had not dared to return to the Room of
Requirement to retrieve his book, and his

ちは、本をそのままにしておこうと決めていた。

「やめないわ」ハーマイオニーがきっぱりと言った。

「あなたが私の言うことをちゃんと聞くまではね。闇の呪文を発明する趣味があるのは、どういう人なのか、私、少し探してみたの」

「彼は、趣味でやったんじゃないー」

「彼、彼ってーどうして男性なの？」

「前にも、同じやり取りをしたはずだ」ハリーが苛立った。

「プリンスだよ、ハーマイオニー、プリンス！」

「いいわ！」

ハーマイオニーの頬がパッと赤く燃え上がった。

ハーマイオニーはポケットからとびきり古い新聞の切り抜きを引っぱり出して、ハリーの目の前の机にバンと叩きつけた。

「見て！この写真を見るのよ！」

ハリーはポロポロの紙切れを拾い上げ、セピア色に変色した動く写真を見つめた。

ロンも体を曲げて覗き込んだ。

十五歳ぐらいの、痩せた少女の写真だった。

かわいいとは言えない。

太く濃い眉に、蒼白い面長な顔は、イライラしているようにも、すねているようにも見えた。

写真の下にはこう書いてある。

「アイリーン プリンス。ホグワーツ ゴブストーン チームのキャプテン」

「それで？」

写真に関係する短い記事にざっと目を通しながらハリーが言った。

学校対抗試合の、かなりつまらない記事だった。

「この人の名前はアイリーン プリンスよ。ハリー、プリンス」

三人は顔を見合わせ、ハリーはハーマイオニーの言おうとしていることに気づいた。

ハリーは笑い出した。

「ありえないよ」

「何が？」

「この女の子が『半純血の……』？ いい加減にしろよ」

performance in Potions was suffering accordingly (though Slughorn, who approved of Ginny, had jocularly attributed this to Harry being lovesick). But Harry was sure that Snape had not yet given up hope of laying hands on the Prince's book, and was determined to leave it where it was while Snape remained on the lookout.

“I'm not dropping it,” said Hermione firmly, “until you've heard me out. Now, I've been trying to find out a bit about who might make a hobby of inventing Dark spells —”

“He didn't make a hobby of it —”

“He, he — who says it's a he?”

“We've been through this,” said Harry crossly. “*Prince*, Hermione, *Prince*!”

“Right!” said Hermione, red patches blazing in her cheeks as she pulled a very old piece of newsprint out of her pocket and slammed it down on the table in front of Harry. “Look at that! Look at the picture!”

Harry picked up the crumbling piece of paper and stared at the moving photograph, yellowed with age; Ron leaned over for a look too. The picture showed a skinny girl of around fifteen. She was not pretty; she looked simultaneously cross and sullen, with heavy brows and a long, pallid face. Underneath the photograph was the caption: EILEEN PRINCE, CAPTAIN OF THE HOGWARTS GOBSTONES TEAM.

“So?” said Harry, scanning the short news item to which the picture belonged; it was a rather dull story about interschool competitions.

“Her name was Eileen Prince. *Prince*,

「え？ どうして？ ハリー、魔法界には本当の王子なんていないのよ！ 綽名か、勝手にその肩書きを名乗っているか、または実名かもしれないわ。そうでしょう？ いいから、よく聞いて！ もしこの女の子の父親が『プリンス』という姓で、母親がマグルなら、それで『半純血のプリンス』になるわ！」

「ああ、独創的だよ、ハーマイオニー……」
「でも、そうなるわ！ この人はたぶん、自分が半分プリンスであることを誇りにしていたのよ！」

「いいかい、ハーマイオニー。女の子じゃないって、僕にはわかるんだ。とにかくわかるんだよ」

「本当は、女の子がそんなに賢いはずはないって、そう思ってるんだわ」ハーマイオニーが怒ったように言った。

「五年も君のそばにいた僕が、女の子が賢くないなんて思うはずないだろ？」ハリーは少し傷ついて反論した。

「書き方だよ。プリンスが男だってことが、とにかくわかるんだ。僕にはわかるんだよ。この女の子は何の関係もない。どっから引っぱり出してきたんだ？」

「図書室よ」ハーマイオニーは予想どおりの答えを言った。

「古い『予言者新聞』が全部取ってあるの。さあ、私、できればアイリーン プリンスのことをもっと調べるつもりよ」

「どうぞ勝手に」ハリーがイライラと言った。

「そうするわ」ハーマイオニーが言った。

「それに、最初に調べるのはー」
ハーマイオニーは肖像画の穴まで行き、ハリーに向かって語気鋭く言った。

「昔の魔法薬の表彰の記録よ」

出ていくハーマイオニーを、ハリーはしばらく睨んでいたが、暗くなりかけた空を眺めながらまた想いに耽った。

「ハーマイオニーは、魔法薬で、君が自分よりできるっていうのが、どうしても我慢ならないだけさ」

ロンは「薬草ときのこ千種」をまた読みはじめながら言った。

「あの本を取り戻したいって考える僕が、ど

Harry.”

They looked at each other, and Harry realized what Hermione was trying to say. He burst out laughing.

“No way.”

“What?”

“You think *she* was the Half-Blood ... ? Oh, come on.”

“Well, why not? Harry, there aren’t any real princes in the Wizarding world! It’s either a nickname, a made-up title somebody’s given themselves, or it could be their actual name, couldn’t it? No, listen! If, say, her father was a wizard whose surname was Prince, and her mother was a Muggle, then that would make her a ‘half-blood Prince’!”

“Yeah, very ingenious, Hermione ...”

“But it would! Maybe she was proud of being half a Prince!”

“Listen, Hermione, I can tell it’s not a girl. I can just tell.”

“The truth is that you don’t think a girl would have been clever enough,” said Hermione angrily.

“How can I have hung round with you for five years and not think girls are clever?” said Harry, stung by this. “It’s the way he writes, I just know the Prince was a bloke, I can tell. This girl hasn’t got anything to do with it. Where did you get this anyway?”

“The library,” said Hermione predictably. “There’s a whole collection of old *Prophets* up there. Well, I’m going to find out more about Eileen Prince if I can.”

“Enjoy yourself,” said Harry irritably.

うかしてると思うか？」
「思わないさ」ロンが力強く言った。
「天才だよ。あのプリンスは。とにかく……ベゾアール石のヒントがなかったら……」
ロンは自分の喉を掻き切る動作をした。
「生きてこんな話をするのができなかっただろ？ そりゃ、君がマルフォイに使った呪文がすごいなんては言わないけどー」
「僕だって」ハリーは即座に言った。
「だけど、マルフォイはちゃんと治ったじゃないか？ たちまち回復だ」
「うん」ハリーが言った。
たしかにそのとおりだったが、やはり良心が痛んだ。
「スネイプのおかげでね……」
「君、また次の土曜日にスネイプの罰則か？」ロンが聞いた。
「うん。そのあとの土曜日も、またそのあとの土曜日もだ」ハリーはため息をついた。
「それに、今学期中に全部の箱をやり終えないと、来学年も続けるなんて臭わせはじめてる」
ただでさえジニーと過ごす時間が少ないのに、その上罰則で時間を取られるのが、特にうんざりだった。
最近ハリーは、スネイプが実は承知の上でそうしているのではないかと、しばしば疑うようになっていた。
というのも、スネイプが、せっかくの好い天気なのに、いろいろな楽しみを失うとは、などと独り言のようにチクチク呟きながら、毎回だんだんハリーの拘束時間を長くしていたからだ。
苦い思いを噛みしめていたハリーは、ジミー・ピークスが急にそばに現れたのでビクッとした。
ジミーは羊皮紙の巻紙を差し出していた。
「ありがとう、ジミー……あっ、ダンブルドアからだ！」
ハリーは巻紙を開いて目を走らせながら、興奮して言った。
「できるだけ早く、校長室に来てほしいって！」
ハリーは、ロンと顔を見合わせた。
「おっどろき？」ロンが囁くように言った。

“I will,” said Hermione. “And the first place I’ll look,” she shot at him, as she reached the portrait hole, “is records of old Potions awards!”

Harry scowled after her for a moment, then continued his contemplation of the darkening sky.

“She’s just never got over you outperforming her in Potions,” said Ron, returning to his copy of *A Thousand Magical Herbs and Fungi*.

“You don’t think I’m mad, wanting that book back, do you?”

“ ‘Course not,” said Ron robustly. “He was a genius, the Prince. Anyway ... without his bezoar tip ...” He drew his finger significantly across his own throat. “I wouldn’t be here to discuss it, would I? I mean, I’m not saying that spell you used on Malfoy was great —”

“Nor am I,” said Harry quickly.

“But he healed all right, didn’t he? Back on his feet in no time.”

“Yeah,” said Harry; this was perfectly true, although his conscience squirmed slightly all the same. “Thanks to Snape ...”

“You still got detention with Snape this Saturday?” Ron continued.

“Yeah, and the Saturday after that, and the Saturday after that,” sighed Harry. “And he’s hinting now that if I don’t get all the boxes done by the end of term, we’ll carry on next year.”

He was finding these detentions particularly irksome because they cut into the already limited time he could have been spending with Ginny. Indeed, he had frequently wondered

「もしかして……見つけたのかな……？」
「すぐ行ったほうがいいよね？」
ハリーは勢いよく立ち上がった。

ハリーはすぐに談話室を出て、八階の廊下をできるだけ急いだ。

途中ビーズ以外には誰とも会わなかった。ビーズは決まり事のように、チョークの欠けらをハリーに投げつけ、ハリーの防衛呪文をかわして、高笑いしながらハリーと反対方向に飛び去った。

ビーズが消え去ったあとの廊下は、閑散としていた。

夜間外出禁止時間まであと十五分しかなかったので、大多数の生徒はもう談話室に戻っていた。

そのとき、悲鳴と衝撃音が聞こえ、ハリーは足を止めて、耳を澄ませた。

「なんて——失礼な——あなた——あああああ——！」

音は近くの廊下から聞こえてくる。

ハリーは杖を構えて音に向かって駆け出し、飛ぶように角を曲がった。

トレローニー先生が、床に大の字に倒れていた。

何枚も重なったショール一枚が顔を覆い、そばにはシェリー酒の瓶が数本転がっていた。

一本は割れている。

「先生——」

ハリーは急いで駆け寄り、トレローニー先生を助け起こした。

ピカピカのビーズ飾りが何本か、メガネに絡まっている。

トレローニー先生は大きくしゃっくりしながら、髪を撫でつけ、てハリーの腕にすがって立ち上がった。

「先生、どうなされたのですか？」

「よくぞ聞いてくださったわ！」

先生が甲高い声で言った。

「あたくし、考えごとをしながら歩き回っておりましたの。あたくしがたまたま垣間見た、いくつかの闇の前兆についてとか……」しかし、ハリーはまともに聞いてはいなかった。

lately whether Snape did not know this, for he was keeping Harry later and later every time, while making pointed asides about Harry having to miss the good weather and the varied opportunities it offered.

Harry was shaken from these bitter reflections by the appearance at his side of Jimmy Peakes, who was holding out a scroll of parchment.

“Thanks, Jimmy ... Hey, it’s from Dumbledore!” said Harry excitedly, unrolling the parchment and scanning it. “He wants me to go to his office as quick as I can!”

They stared at each other.

“Blimey,” whispered Ron. “You don’t reckon ... he hasn’t found ... ?”

“Better go and see, hadn’t I?” said Harry, jumping to his feet.

He hurried out of the common room and along the seventh floor as fast as he could, passing nobody but Peeves, who swooped past in the opposite direction, throwing bits of chalk at Harry in a routine sort of way and cackling loudly as he dodged Harry’s defensive jinx. Once Peeves had vanished, there was silence in the corridors; with only fifteen minutes left until curfew, most people had already returned to their common rooms.

And then Harry heard a scream and a crash. He stopped in his tracks, listening.

“How — *dare* — you — aaaaargh!”

The noise was coming from a corridor nearby; Harry sprinted toward it, his wand at the ready, hurtled around another corner, and saw Professor Trelawney sprawled upon the floor, her head covered in one of her many

いま立っている場所がどこなのかに気がついたからだ。

右には踊るトロールのタペストリー、左一面は頑丈な石壁だ。

その裏に隠れているのは――。

「先生、『必要の部屋』に入ろうとしていたのですか？」

「……あたくしに啓示された予兆についてとか――えっ？」

先生は急にそわそわしはじめた。

「『必要の部屋』です」ハリーが繰り返した。

「そこに入ろうとなさっていたのですか？」

「あたくし――あら――生徒が知っているとは、あたくし存じませんでしたわ！」

「全員ではありません」ハリーが言った。

「でも、何があったのですか？ 悲鳴を上げましたね……怪我でもしたように聞こえましたが……」

「あたくし、あの」

トレローニー先生は、身を護るかのようにショールを体に巻きつけ、拡大された巨大な目でハリーをじっと見下ろした。

「あたくし――あ――ちょっとした物を――あ――個人的な物をこの部屋に置いておこうと……」

それから先生は、「ひどい言いがかりですわ」のようなことを呟いた。

「そうですか」

ハリーは、シェリー酒の瓶をちらりと見下ろしながら言った。

「でも、中に入って隠すことができなかったのですね？」

変だ、とハリーは思った。

「部屋」は、プリンスの本を隠したいと思ったとき、とうとうハリーのために開いてくれた。

「ええ、ちゃんと入りましたことよ」

トレローニー先生は壁を睨みつけながら言った。

「でも、そこには先客がいましたの」

「誰かが中に――？ 誰が？」ハリーが詰問した。

「そこには誰がいたんです？」

「さっぱりわかりませんわ」

shawls, several sherry bottles lying beside her, one broken.

“Professor —”

Harry hurried forward and helped Professor Trelawney to her feet. Some of her glittering beads had become entangled with her glasses. She hiccuped loudly, patted her hair, and pulled herself up on Harry’s helping arm.

“What happened, Professor?”

“You may well ask!” she said shrilly. “I was strolling along, brooding upon certain dark portents I happen to have glimpsed ...”

But Harry was not paying much attention. He had just noticed where they were standing: There on the right was the tapestry of dancing trolls, and on the left, that smoothly impenetrable stretch of stone wall that concealed —

“Professor, were you trying to get into the Room of Requirement?”

“... omens I have been vouchsafed — what?” She looked suddenly shifty.

“The Room of Requirement,” repeated Harry. “Were you trying to get in there?”

“I — well — I didn’t know students knew about —”

“Not all of them do,” said Harry. “But what happened? You screamed. ... It sounded as though you were hurt. ...”

“I — well,” said Professor Trelawney, drawing her shawls around her defensively and staring down at him with her vastly magnified eyes. “I wished to — ah — deposit certain — um — personal items in the room. ...” And she muttered something about “nasty accusations.”

“Right,” said Harry, glancing down at the

ハリーの緊迫した声に少したじろぎながら、トレローニー先生が言った。

「『部屋』に入ったら、声が聞こえましたの。あたくし長年隠し——いえ、『部屋』を使ってきましたけれど——こんなことは初めて」

「声？何を言っていたんです？」

「何かを言っていたのかどうか、わかりませんわ」

トレローニー先生が言った。

「ただ……歓声を上げていました」

「歓声を？」

「大喜びで」先生が嶺いた。

ハリーは先生をじっと見た。

「男でしたか？女でしたか？」

「想像がまずけど、男でしょう」トレローニー先生が言った。

「それで、喜んでいたのでですか？」

「大喜びでしたわ」

トレローニー先生は尊大に鼻を鳴らしながら言った。

「何かお祝いしているみたいに？」

「間違いなくそうですわ」

「それから——？」

「それから、あたくし、呼びかけましたの。

『そこにいるのは誰？』と」

「聞かなければ、誰がいるのかわからなかったんですか？」ハリーは少しじりじりしながら聞いた。

「『内なる眼』は——」

トレローニー先生は、ショールや何本ものキラキラするビーズ飾りを整えながら、威厳を込めて言った。

「歓声などの俗な世界より、ずっと超越した事柄を見つめておりましたの」

「そうですか」ハリーは早口で言った。

トレローニー先生の「内なる眼」については、すでに嫌というほど聞かされていた。

「それで、その声は、そこに誰がいるかを答えたのですか？」

「いいえ、答えませんでした。『部屋』がまっ暗になって、次に気がついたときには、頭から先に放り出されておりましたの」

「それで、そういうことが起こるだろうというのは、見通せなかったというわけです

sherry bottles. “But you couldn’t get in and hide them?”

He found this very odd; the room had opened for him, after all, when he had wanted to hide the Half-Blood Prince’s book.

“Oh, I got in all right,” said Professor Trelawney, glaring at the wall. “But there was somebody already in there.”

“Somebody in — ? Who?” demanded Harry. “Who was in there?”

“I have no idea,” said Professor Trelawney, looking slightly taken aback at the urgency in Harry’s voice. “I walked into the room and I heard a voice, which has never happened before in all my years of hiding — of using the room, I mean.”

“A voice? Saying what?”

“I don’t know that it was saying anything,” said Professor Trelawney. “It was ... whooping.”

“Whooping?”

“Gleefully,” she said, nodding.

Harry stared at her.

“Was it male or female?”

“I would hazard a guess at male,” said Professor Trelawney.

“And it sounded happy?”

“Very happy,” said Professor Trelawney sniffily.

“As though it was celebrating?”

“Most definitely.”

“And then — ?”

“And then I called out ‘Who’s there?’ ”

“You couldn’t have found out who it was

か？」ハリーはそう聞かすにはいられなかった。

「いいえ。言いましたでございましょう。まっ暗——」

トレローニー先生は急に言葉を切り、何が言いたいのかと疑うようにハリーを睨んだ。

「ダンブルドア先生にお話ししたほうがいいと思います」

ハリーが言った。

「ダンブルドア先生は知るべきなんです。マルフォイがお祝いでいたこと——いえ、誰かが先生を『部屋』から放り出したことをです」

驚いたことに、トレローニー先生はハリーの意見を聞くと、気位高く背筋を伸ばした。

「校長先生は、あたくしにあまり来てほしくないとのめかししましたわ」トレローニー先生は冷たく言った。

「あたくしがそばにいることの価値を評価なさらない方に、無理にご一緒願うようなあたくしではございませんわ。ダンブルドアが、トランプ占いの警告を無視なさるおつもりなのでしたら——」

先生の骨ばった手が、突然ハリーの手首をつかんだ。

「何度も何度も、どんな並べ方をしても——」

そして先生は、ショールの下から仰々しくトランプを一枚取り出した。

「——稲妻に撃たれた塔」先生が囁いた。

「災難。大惨事。刻々と近づいてくる……」

「そうですか」ハリーはさっきと同じ答え方をした。

「えーと……それでもダンブルドアに、その声のことを話すべきだと思います。それに、まっ暗になって『部屋』から放り出されたことなんかも……」

「そう思いますこと？」

トレローニー先生はしばらく考慮しているようだったが、ハリーには、先生がちょっとした冒険話を聞かせたがっていることが読み取れた。

「僕は、いま校長先生に会いに行くところです」ハリーが言った。

「校長先生と約束があるんです。一緒に行き

without asking?” Harry asked her, slightly frustrated.

“The Inner Eye,” said Professor Trelawney with dignity, straightening her shawls and many strands of glittering beads, “was fixed upon matters well outside the mundane realms of whooping voices.”

“Right,” said Harry hastily; he had heard about Professor Trelawney’s Inner Eye all too often before. “And did the voice say who was there?”

“No, it did not,” she said. “Everything went pitch-black and the next thing I knew, I was being hurled headfirst out of the room!”

“And you didn’t see that coming?” said Harry, unable to help himself.

“No, I did not, as I say, it was pitch ——” She stopped and glared at him suspiciously.

“I think you’d better tell Professor Dumbledore,” said Harry. “He ought to know Malfoy’s celebrating —— I mean, that someone threw you out of the room.”

To his surprise, Professor Trelawney drew herself up at this suggestion, looking haughty.

“The headmaster has intimated that he would prefer fewer visits from me,” she said coldly. “I am not one to press my company upon those who do not value it. If Dumbledore chooses to ignore the warnings the cards show ——” Her bony hand closed suddenly around Harry’s wrist. “Again and again, no matter how I lay them out ——” And she pulled a card dramatically from underneath her shawls. “—— the lightning-struck tower,” she whispered. “Calamity. Disaster. Coming nearer all the time ...”

ましよう」
「あら、まあ、それでしたら」
トレローニー先生は、微笑んだ。
それから屈み込んでシェリー酒の瓶を拾い集め、近くの壁のニッチに置いてあった青と白の大きな花瓶に、無造作に投げ捨てた。
「ハリー、あなたがクラスにいないと、寂しいですわ」
一緒に歩きながら、トレローニー先生が感傷的に言った。
「あなたは大了『予見者』ではありませんでしたが……でも、すばらしい『対象者』でしたわ……」
ハリーは何も言わなかった。
トレローニー先生の、絶え間ない宿命予言の「対象者」にされるのには辟易していた。
「残念ながらー」先生はしゃべり続けた。
「あの駄馬はーごめんあそばせ。あのケンタウルスはートランプ占いを何も知りませんのよ。あたくし、質問しましたのー予見者同士としてごますけどー災難が近づいているという遠くの振動を、あなたも感じませんか？ と。ところが、あのケンタウルスは、あたくしのことを、ほとんど滑稽だと思ったらいいんです。そうです、滑稽だと！」
トレローニー先生の声がヒステリー気味に高くなり、瓶はもう捨ててきたはずなのに、ハリーは、シェリー酒のきつい匂いを嗅ぎ取った。
「たぶんあの馬は、あたくしが曾曾祖母の才能を受け継いでいない、などと誰かが言うのを聞いたのですわ。そういう噂は、嫉妬深い人たちが、もう何年も前から言いふらしてきたことです。あたくしがそういう人たちに何と言ってやるか、ハリー、おわかり？ あたくしの才能はダンブルドアに十分証明済みです。そうでなかったら、ダンブルドアはこの偉大な学校で、あたくしに教えさせたかしら？ この長年の間、あたくしをこんなに信用なきったかしら？」
ハリーは、ゴニョゴニョと聞き取れない言葉を呟いた。
「最初のダンブルドアの面接のことは、よく憶えていましてよ」トレローニー先生は、かすれ声で話し続けた。

“Right,” said Harry again. “Well ... I still think you should tell Dumbledore about this voice, and everything going dark and being thrown out of the room. ...”

“You think so?” Professor Trelawney seemed to consider the matter for a moment, but Harry could tell that she liked the idea of retelling her little adventure.

“I’m going to see him right now,” said Harry. “I’ve got a meeting with him. We could go together.”

“Oh, well, in that case,” said Professor Trelawney with a smile. She bent down, scooped up her sherry bottles, and dumped them unceremoniously in a large blue-and-white vase standing in a nearby niche.

“I miss having you in my classes, Harry,” she said soulfully as they set off together. “You were never much of a Seer ... but you were a wonderful Object ...”

Harry did not reply; he had loathed being the Object of Professor Trelawney’s continual predictions of doom.

“I am afraid,” she went on, “that the nag — I’m sorry, the centaur — knows nothing of cartomancy. I asked him — one Seer to another — had he not, too, sensed the distant vibrations of coming catastrophe? But he seemed to find me almost comical. Yes, comical!”

Her voice rose rather hysterically, and Harry caught a powerful whiff of sherry even though the bottles had been left behind.

“Perhaps the horse has heard people say that I have not inherited my great-great-grandmother’s gift. Those rumors have been bandied about by the jealous for years. You

「ダンブルドアは、もちろん、とても感心しましたわ……。あたくしは、ホッグズ ヘッドに泊まっておりました。ところで、あそこはお勧めしませんわーあなた、ベッドにはダニですよーでも、予算が少なかったの。ダンブルドアは、あたくしの部屋までわざわざお訪ねくださったわ。あたくしに質問なされた……。白状いたしますとね、はじめのうちはダンブルドアが『占い学』をお気に召さないようだと思いましたわ……。そして、あたくし、なんだかちょっと変な気分になりましたね。その日はあまり食べていませんでしたの……。でも、それから……」

ハリーは、いま初めてまともに傾聴していた。そのとき何が起こったかを知っていたからだ。

トレローニー先生は、ハリーとヴォルデモートに関する予言をし、それがハリーの全人生を変えてしまったのだ。

「……でも、そのとき、セプルス スネイプが、無礼にも邪魔をしたのです！」

「えっ？」

「そうです。扉の外で騒ぎがあって、ドアがパッと開いて、そこはかなり粗野なバーテンが、スネイプと一緒に立っていたのです。スネイプは間違えて階段を上がってきたとか、戯言を並べ立てていましたわ。でも、あたくしはむしろ、ダンブルドアとあたくしの面接を盗み聞きしているところを捕まったのだらうと思いましたわーだって、スネイプは、あの時、職を求めていますもの。間違いなく、面接のコツを探り出そうとしたのですわ！ そう、そのあとで、おわかりでございませよ、ダンブルドアはあたくしを採用なさることにずっと乗り気になったようでしたわ。ですから、ハリー、あたくしとしては、ダンブルドアには、気取らず才能をひけらかさないあたくしと、鍵穴から盗み聞きするような、押しつけがましい図々しい若い男との、明らかな相違がおわかりになったのだと、そう考えざるをえませんかわーあら、ハリー？」

トレローニー先生は、ハリーが脇にいないことにやっと気づいて、振り返った。

ハリーは足を止め、二人の間が三メートルも

know what I say to such people, Harry? Would Dumbledore have let me teach at this great school, put so much trust in me all these years, had I not proved myself to him?”

Harry mumbled something indistinct.

“I well remember my first interview with Dumbledore,” went on Professor Trelawney, in throaty tones. “He was deeply impressed, of course, deeply impressed. ... I was staying at the Hog’s Head, which I do not advise, incidentally — bedbugs, dear boy — but funds were low. Dumbledore did me the courtesy of calling upon me in my room. He questioned me. ... I must confess that, at first, I thought he seemed ill-disposed toward Divination ... and I remember I was starting to feel a little odd, I had not eaten much that day ... but then ...”

And now Harry was paying attention properly for the first time, for he knew what had happened then: Professor Trelawney had made the prophecy that had altered the course of his whole life, the prophecy about him and Voldemort.

“... but then we were rudely interrupted by Severus Snape!”

“What?”

“Yes, there was a commotion outside the door and it flew open, and there was that rather uncouth barman standing with Snape, who was waffling about having come the wrong way up the stairs, although I’m afraid that I myself rather thought he had been apprehended eavesdropping on my interview with Dumbledore — you see, he himself was seeking a job at the time, and no doubt hoped to pick up tips! Well, after that, you know, Dumbledore seemed much more disposed to

開いていた。

「ハリー？」トレローニー先生は、訝しげにもう一度呼びかけた。

おそらく、ハリーの顔が蒼白だったのだろう。

先生はギョッとして、心配そうな顔になった。

ハリーは身動きもせずに突っ立っていた。

衝撃が波のように打ち寄せては砕けた。

次々と押し寄せる波が、長年自分には秘密にされてきたこの情報以外のすべてのものを、意識から掻き消していた……。

予言を盗み聞きしたのはスネイプだった。

スネイプが、その予言をヴォルデモートに知らせた。

スネイプとピーター ペティグリューとがグルになって、ヴォルデモートがリリーとジェームズ、そしてその息子を追跡するように仕向けたのだ……。

ハリーには、もはや、ほかの事はどうでもよくなっていた。

「ハリー？」トレローニー先生がもう一皮声をかけた。

「ハリー一緒に校長先生にお目にかかりにくいんじゃないかしら？」

「ここにいてください」ハリーは麻痺した唇の間から言葉を搾り出した。

「でも、あなた……あたくしは、『部屋』で襲われたことを校長先生に申し上げるつもりで……」

「ここにいてください！」ハリーが怒ったように繰り返した。

ハリーがトレローニー先生の前を駆け抜け、ダンブルドアの部屋に通じる廊下に向かって角を曲がっていくのを、トレローニー先生は啞然として見ていた。

廊下にはガーゴイルが見張りに立っていた。

ハリーはガーゴイルに向かって合言葉を怒鳴り、動く螺旋階段を、一度に三段ずつ駆け上がった。

ダンブルドアの部屋の扉を軽くノックするのではなく、ガンガン叩いた。

すると静かな声が答えた。

「お入り」

しかし、ハリーは、すでに部屋に飛び込んで

give me a job, and I could not help thinking, Harry, that it was because he appreciated the stark contrast between my own unassuming manners and quiet talent, compared to the pushing, thrusting young man who was prepared to listen at keyholes — Harry, dear?”

She looked back over her shoulder, having only just realized that Harry was no longer with her; he had stopped walking and they were now ten feet from each other.

“Harry?” she repeated uncertainly.

Perhaps his face was white to make her look so concerned and frightened. Harry was standing stock-still as waves of shock crashed over him, wave after wave, obliterating everything except the information that had been kept from him for so long. ...

It was Snape who had overheard the prophecy. It was Snape who had carried the news of the prophecy to Voldemort. Snape and Peter Pettigrew together had sent Voldemort hunting after Lily and James and their son. ...

Nothing else mattered to Harry just now.

“Harry?” said Professor Trelawney again. “Harry — I thought we were going to see the headmaster together?”

“You stay here,” said Harry through numb lips.

“But dear ... I was going to tell him how I was assaulted in the Room of —”

“You stay here!” Harry repeated angrily.

She looked alarmed as he ran past her, around the corner into Dumbledore’s corridor, where the lone gargoyle stood sentry. Harry shouted the password at the gargoyle and ran up the moving spiral staircase three steps at a

いた。
不死鳥のフォークスが振り返った。
フォークスの輝く黒い目が、窓の外に沈む夕日の金色を映して光っていた。
ダンブルドアは、旅行用の長い黒いマントを両腕にかけ、窓から校庭を眺めて立っていた。
「さて、ハリー、きみを一緒に連れていくと約束したのう」
ほんの一瞬、ハリーは何を言われているのかわからなかった。
トレローニーとの会話が、ほかのことをいっさい頭から追い出してしまい、脳みその動きがとても鈍いような気がした。
「一緒に……先生と……？」
「もちろん、もしきみがそうしなければじゃが」
「もし僕が……」
そして、ハリーは、もともとどうしてダンブルドアの校長室に急いでいたかを思い出した。
「見つけたのですか？ 分霊箱を見つけたのですか？」
「そうじゃろうと思う」
怒りと恨みの心が、衝撃と興奮の気持ちと戦った。
しばらくの間、ハリーは口がきけなかった。
「恐れを感じるのは当然じゃ」ダンブルドアが言った。
「恐くありません！」ハリーは即座に答えた。本当のことだった。
恐怖という感情だけはまったく感じていなかった。
「どの分霊箱ですか？ どこにあるのですか？」
「どの分霊箱かは定かではない——ただし、蛇だけは除外できるじゃろう——ここから何キロも離れた海岸の洞窟に隠されているらしい。その洞窟がどこにあるかを、わしは長い間探しておった。トム・リドルが、かつて年に一度の孤児院の遠足で、二人の子どもを脅した洞窟じゃ。憶えておるかの？」
「はい」ハリーが答えた。
「どんなふうに護られているのですか？」
「わからぬ。こうではないかと思うことはあ

time. He did not knock upon Dumbledore's door, he hammered; and the calm voice answered, "Enter" after Harry had already flung himself into the room.

Fawkes the phoenix looked around, his bright black eyes gleaming with reflected gold from the sunset beyond the windows. Dumbledore was standing at the window looking out at the grounds, a long, black traveling cloak in his arms.

"Well, Harry, I promised that you could come with me."

For a moment or two, Harry did not understand; the conversation with Trelawney had driven everything else out of his head and his brain seemed to be moving very slowly.

"Come ... with you ... ?"

"Only if you wish it, of course."

"If I ..."

And then Harry remembered why he had been eager to come to Dumbledore's office in the first place. "You've found one? You've found a Horcrux?"

"I believe so."

Rage and resentment fought shock and excitement: For several moments, Harry could not speak.

"It is natural to be afraid," said Dumbledore.

"I'm not scared!" said Harry at once, and it was perfectly true; fear was one emotion he was not feeling at all. "Which Horcrux is it? Where is it?"

"I am not sure which it is — though I think we can rule out the snake — but I believe it to be hidden in a cave on the coast many miles from here, a cave I have been trying to locate

るが、まったく間違っておるかもしれぬ」
*二ダンブルドアは躊躇したが、やがてこう言った。

「ハリー、わしはきみに一緒に来てよいと言った。そして、約束は守る。しかし、きみに警告しないのは大きな間違いじゃろう。今回はきわめて危険じゃ」

「僕、行きます」

ハリーはダンブルドアの言葉が終わらないうちに答えていた。

スネイプへの怒りが沸騰し、何か命がけの危険なことをしたいという願いが、この数分で十倍に膨れ上がっていた。

それがハリーの顔に顕われたらしい。

ダンブルドアは窓際を離れ、銀色の眉根に微かに皺を寄せて、ハリーをさらにしっかりと見つめた。

「何があったのじゃ？」

「何にもあくません」ハリーは即座に嘘をついた。

「なぜ気が動転しておるのじゃ？」

「動転していません」

「ハリー、きみはよい閉心術者とは——」

その言葉が、ハリーの怒りに点火した。

「スネイプ！」

ハリーは大声を出した。

フォークスが二人の背後で、小さくギャッと鳴いた。

「何かありましたとも！ スネイプです！ あいつが、ヴォルデモートに予言を教えたんだ。あいつだったんだ。扉の外で聞いていたのは、あいつだった。トレローニーが教えてくれた！」

ダンブルドアは表情を変えなかった。

しかし、沈む太陽に赤く吸えるその顔の下で、ダンブルドアがずっと血の気を失ったと、ハリーは思った。

しばらくの間、ダンブルドアは無言だった。

「いつ、それを知ったのじゃ？」しばらくして、ダンブルドアが聞いた。

「たったいまです！」ハリーが言った。

叫びたいのを抑えるのがやっとだった。

しかし、突然、もう我慢できなくなった。

「それなのに、先生はあいつにここで教えさせた。そしてあいつは、ヴォルデモートに僕

for a very long time: the cave in which Tom Riddle once terrorized two children from his orphanage on their annual trip; you remember?”

“Yes,” said Harry. “How is it protected?”

“I do not know; I have suspicions that may be entirely wrong.” Dumbledore hesitated, then said, “Harry, I promised you that you could come with me, and I stand by that promise, but it would be very wrong of me not to warn you that this will be exceedingly dangerous.”

“I’m coming,” said Harry, almost before Dumbledore had finished speaking. Boiling with anger at Snape, his desire to do something desperate and risky had increased tenfold in the last few minutes. This seemed to show on Harry’s face, for Dumbledore moved away from the window and looked more closely at Harry, a slight crease between his silver eyebrows.

“What has happened to you?”

“Nothing,” lied Harry promptly.

“What has upset you?”

“I’m not upset.”

“Harry, you were never a good Occlumens —”

The word was the spark that ignited Harry’s fury.

“Snape!” he said, very loudly, and Fawkes gave a soft squawk behind them. “Snape’s what’s happened! He told Voldemort about the prophecy, it was *him*, he listened outside the door, Trelawney told me!”

Dumbledore’s expression did not change, but Harry thought his face whitened under the bloody tinge cast by the setting sun. For a long

の父と母を追うように言った！」
まるで戦いの最中のように、ハリーは息を荒らげていた。
眉根一つ動かさないダンブルドアに背を向け、ハリーは部屋を往ったり来たりしながら拳をさすり、あたりの物を殴り倒したい衝動を、必死で抑えた。
ダンブルドアに向かって怒りをぶっつけ、怒鳴り散らしたかった。
しかし同時に、ダンブルドアと一緒に分霊箱を破壊しにいきたかった。
ダンブルドアに向かって、スネイプを信用するなんて、バカな老人のすることだと言ってやりたかった。
しかし、一方で自分が怒りを抑制しなければ、ダンブルドアと一緒に連れていってこないことも恐れた……。
「ハリー」ダンブルドアが静かに言った。
「わしの言うことをよく聞きなさい」
動き回るのをやめるのも、叫びたいのをこらえると同じぐらい難しかった。
ハリーは唇を噛んで立ち止まり、皺の刻まれたダンブルドアの顔を見た。
「スネイプ先生はひどい間違ー」
「間違いを犯したなんて、言わないでください。先生、あいつは扉のところで盗聴してたんだ！」
「最後まで言わせておくれ」
ダンブルドアは、ハリーが素っ気なく頷くまで待った。
「スネイプ先生はひどい間違いを犯した。トレローニー先生の予言の前半を聞いたあの夜、スネイプ先生はまだヴォルデモート卿の配下だった。当然、ご主人棟に、自分が開いたことを急いで伝えた。それが、ご主人様に深く関わる事柄だったからじゃ。しかし、スネイプ先生は知らなかったー知る由もなかったのじゃーヴォルデモートがその後、どこの男の子を獲物にするのかも知らず、ヴォルデモートの残忍な追求の末に殺される両親が、スネイプ先生の知っている人々だとは、知らなかったのじゃ。それがきみの父君、母君だとはー」
ハリーは、虚ろな笑い声を上げた。
「あいつは僕の父さんもシリウスも、同じよ

moment, Dumbledore said nothing. “When did you find out about this?” he asked at last.

“Just now!” said Harry, who was refraining from yelling with enormous difficulty. And then, suddenly, he could not stop himself. “AND YOU LET HIM TEACH HERE AND HE TOLD VOLDEMORT TO GO AFTER MY MUM AND DAD!”

Breathing hard as though he was fighting, Harry turned away from Dumbledore, who still had not moved a muscle, and paced up and down the study, rubbing his knuckles in his hand and exercising every last bit of restraint to prevent himself knocking things over. He wanted to rage and storm at Dumbledore, but he also wanted to go with him to try and destroy the Horcrux; he wanted to tell him that he was a foolish old man for trusting Snape, but he was terrified that Dumbledore would not take him along unless he mastered his anger. ...

“Harry,” said Dumbledore quietly. “Please listen to me.”

It was as difficult to stop his relentless pacing as to refrain from shouting. Harry paused, biting his lip, and looked into Dumbledore’s lined face.

“Professor Snape made a terrible —”

“Don’t tell me it was a mistake, sir, he was listening at the door!”

“Please let me finish.” Dumbledore waited until Harry had nodded curtly, then went on. “Professor Snape made a terrible mistake. He was still in Lord Voldemort’s employ on the night he heard the first half of Professor Trelawney’s prophecy. Naturally, he hastened to tell his master what he had heard, for it

うに憎んでいた！先生、気がつかないんですか？スネイプが憎んだ人間は、なぜか死んでしまう」

「ヴォルデモート卿が予言をどう解釈したのかに気づいたとき、スネイプ先生がどんなに深い自責の念に駆られたか、きみには想像もつかないじゃろう。人生最大の後悔だったじゃろうと、わしはそう信じておる。それ故に、スネイプ先生は戻ってきたー」

「でも、先生、あいつこそ、とても優れた閉心術者じゃないんですか？」
平静に話そうと努力することで、ハリーの声は震えていた。

「それに、ヴォルデモートは、いまでも、スネイプが自分の味方だと信じているのではないんですか？先生……スネイプがこっちの味方だと、なぜ確信していらっしゃるのですか？」

ダンブルドアは、一瞬沈黙した。
何事かに関して、意思を固めようとしているかのようだった。

しばらくしてダンブルドアは口を開いた。

「わしは確信しておる。セブルス スネイプを完全に信用しておる」

ハリーは自分を落ち着かせようと、しばらく採呼吸した。しかし、ムダだった。

「でも、僕は違います！」

ハリーはまた大声を出していた。

「あいつは、いまのいま、ドラコ マルフォイと一緒に何か企んでる。先生の目と鼻の先で。それでも先生はまだー」

「ハリー、このことはもう話し合ったじゃろう」

ダンブルドアは再び厳しい口調に戻った。

「わしの見解はもうきみに話した」

「先生は今夜、学校を離れる。それなのに、先生はきっと、考えたこともないんでしょうね、スネイプとマルフォイが何かするかもしれないなんてー」

「何をするというのじゃ？」ダンブルドアは眉を吊り上げた。

「具体的に、二人が何をすると疑っておるのじゃ？」

「僕は……あいつらは何か企んでるんだ！」
そう言いながら、ハリーは拳を固めていた。

concerned his master most deeply. But he did not know — he had no possible way of knowing — which boy Voldemort would hunt from then onward, or that the parents he would destroy in his murderous quest were people that Professor Snape knew, that they were your mother and father —”

Harry let out a yell of mirthless laughter.

“He hated my dad like he hated Sirius! Haven’t you noticed, Professor, how the people Snape hates tend to end up dead?”

“You have no idea of the remorse Professor Snape felt when he realized how Lord Voldemort had interpreted the prophecy, Harry. I believe it to be the greatest regret of his life and the reason that he returned —”

“But *he’s* a very good Occlumens, isn’t he, sir?” said Harry, whose voice was shaking with the effort of keeping it steady. “And isn’t Voldemort convinced that Snape’s on his side, even now? Professor ... how can you be *sure* Snape’s on our side?”

Dumbledore did not speak for a moment; he looked as though he was trying to make up his mind about something. At last he said, “I am sure. I trust Severus Snape completely.”

Harry breathed deeply for a few moments in an effort to steady himself. It did not work.

“Well, I don’t!” he said, as loudly as before. “He’s up to something with Draco Malfoy right now, right under your nose, and you still —”

“We have discussed this, Harry,” said Dumbledore, and now he sounded stern again. “I have told you my views.”

“You’re leaving the school tonight, and I’ll

「トレローニー先生がいま『必要の部屋』に入って、シェリー酒の瓶を隠そうとしていたんです。そしたら、マルフォイが何かを祝って喜んでいる声を聞いたんです！あの部屋で、マルフォイは何か危険な物を修理しようとしていた。きっと、とうとう修理が終わったんです。それなのに、先生は、学校を出ていこうとしている。何にもせずー」

「もうよい」
ダンブルドアの声はとても静かだったが、ハリーはすぐに黙った。
ついに見えない線を踏みこ越えてしまったと気づいたのだ。

「今学年になって、わしの留守中に、学校を無防備の状態で放置したことが、一度たりともあると思うか？ 否じゃ。今夜、わしがここを離れるときには、再び追加的な保護策が施されるであろう。ハリー、わしが生徒たちの安全を真剣に考えていないなどと、仮初にも言うではないぞ」

「そんなつもりではー」
ハリーは少し恥じ入って、口ごもったが、ダンブルドアがその言葉を遮った。

「このことは、これ以上話したくはない」
ハリーは、返す言葉を呑み込んだ。
言いすぎて、ダンブルドアと一緒にに行く機会をだめにしてしまったのではないかと恐れたが、ダンブルドアは言葉を続けた。

「今夜は、わしと一緒にいきたいか？」
「はい」ハリーは即座に答えた。
「よろしい。それでは、よく聞くのじゃ」
ダンブルドアは背筋を正し、威厳に満ちた姿で言った。

「連れていくには、一つ条件がある。わしが与える命令には、すぐに従うことじゃ。しかも質問することなしにじゃ」

「もちろんです」
「ハリー、よく理解するのじゃ。わしは、どんな命令にも従うように言うておる。たとえば、『逃げよ』、『隠れよ』、『戻れ』などの命令もじゃ。約束できるか？」

「僕ーはい、もちろんです」
「わしが隠れるように言うたら、そうするか？」
「はい」

bet you haven't even considered that Snape and Malfoy might decide to —”

“To what?” asked Dumbledore, his eyebrows raised. “What is it that you suspect them of doing, precisely?”

“I ... they're up to something!” said Harry, and his hands curled into fists as he said it. “Professor Trelawney was just in the Room of Requirement, trying to hide her sherry bottles, and she heard Malfoy whooping, celebrating! He's trying to mend something dangerous in there and if you ask me, he's fixed it at last and you're about to just walk out of school without —”

“Enough,” said Dumbledore. He said it quite calmly, and yet Harry fell silent at once; he knew that he had finally crossed some invisible line. “Do you think that I have once left the school unprotected during my absences this year? I have not. Tonight, when I leave, there will again be additional protection in place. Please do not suggest that I do not take the safety of my students seriously, Harry.”

“I didn't —” mumbled Harry, a little abashed, but Dumbledore cut across him.

“I do not wish to discuss the matter any further.”

Harry bit back his retort, scared that he had gone too far, that he had ruined his chance of accompanying Dumbledore, but Dumbledore went on, “Do you wish to come with me tonight?”

“Yes,” said Harry at once.

“Very well, then: Listen.” Dumbledore drew himself up to his full height. “I take you with me on one condition: that you obey any command I might give you at once, and

「わしが逃げよと言うたら、従うか？」
「はい」
「わしを置き去りにせよ、自らを助けよと言うたら、言われたとおりにするか？」
「僕——」
「ハリー？」二人は一瞬見つめ合った。
「はい、先生」
「よろしい。それでは、戻って『透明マント』を取ってくるのじゃ。五分後に正面玄関で落ち合うこととする」
ダンブルドアは後ろを向き、まっ赤に染まった窓から外を見た。
太陽がいまやルビーのように赤々と、地平線に沈もうとしていた。
ハリーは急いで校長室を出て、螺旋階段を下りた。
不思議にも、急に頭が冴え冴えとしてきた。何をなすべきかがわかっていた。
ハリーが談話室に戻ったとき、ロンとハーマイオニーは一緒に座っていた。
「ダンブルドアは何のご用だったの？」
ハーマイオニーが間髪を入れずに聞いた。
「ハリー、あなた、大丈夫？」ハーマイオニーは心配そうに聞いた。
冴えた頭で、そういえば何故ハーマイオニーは僕の精神状態を正確に把握できるのだろうと訝しく思った。
「大丈夫だ」
ハリーは足早に二人のそばを通り過ぎながら、短く答えた。
階段を駆け上がり、寝室に入り、トランクを勢いよく開けて「忍びの地図」と丸めたソックスを一足引っぱり出した。
それから、また急いで階段を下りて談話室に戻り、呆然と座ったままのロンとハーマイオニーのところまで駆け戻って急停止した。
「時間がないんだ」
ハリーは息を弾ませて言った。
「ダンブルドアは、僕が『透明マント』を取りに戻ったと思ってる。いいかい……」
ハリーは、どこへ何のために行くのかを、二人にかい摘んで話した。
ハーマイオニーが恐怖に息を呑んでも、ロンが急いで質問しても、ハリーは話を中断しなかった。

without question.”

“Of course.”

“Be sure to understand me, Harry. I mean that you must follow even such orders as ‘run,’ ‘hide,’ or ‘go back.’ Do I have your word?”

“I — yes, of course.”

“If I tell you to hide, you will do so?”

“Yes.”

“If I tell you to flee, you will obey?”

“Yes.”

“If I tell you to leave me and save yourself, you will do as I tell you?”

“I —”

“Harry?”

They looked at each other for a moment.

“Yes, sir.”

“Very good. Then I wish you to go and fetch your Invisibility Cloak and meet me in the entrance hall in five minutes’ time.”

Dumbledore turned back to look out of the fiery window; the sun was now a ruby red glare along the horizon. Harry walked quickly from the office and down the spiral staircase. His mind was oddly clear all of a sudden. He knew what to do.

Ron and Hermione were sitting together in the common room when he came back. “What does he want?” Hermione said at once. “Harry, are you okay?” she added anxiously.

“I’m fine,” said Harry shortly, racing past them. He dashed up the stairs and into his dormitory, where he flung open his trunk and pulled out the Marauder’s Map and a pair of balled-up socks. Then he sped back down the stairs and into the common room, skidding to a

細かいことはあとで二人で考えることができるだろう。

「……だから、どういうことかわかるだろう？」ハリーは、最後までくし立てた。

「ダンブルドアは今夜ここにはいない。だからマルフォイは、何を企んでいるにせよ、邪魔が入らないいいチャンスなんだ。いいから、聞いてくれ！」

ロンとハーマイオニーが口を挟みたくてたまらなそうにしたので、ハリーは噛みつくように言った。

「『必要の部屋』で歓声を上げていたのはマルフォイだってことが、僕にはわかっているんだ。さあ——」

ハリーは「忍びの地図」をハーマイオニーの手に押しつけた。

「マルフォイを見張らないといけない。それにスネイプも見張らないといけない。ほかに誰でもいいから、D.A.のメンバーを掻き集められるだけ集めてくれ。ハーマイオニー、ガリオン金貨の連絡網はまだ使えるね？ダンブルドアは学校に追加的な保護策を施したっていうけど、スネイプが絡んでいるのなら、ダンブルドアの保護措置のことも、回避の方法も知られている——だけど、スネイプは、君たちが監視しているとは思わないだろう？」

「ハリー——」ハーマイオニーは恐怖に目を見開いて、何か言いかけた。

「議論している時間がない」ハリーは素っ気なく言った。

「これも持っていて——」ハリーは、ロンの両手にソックスを押しつけた。

「ありがとう」ロンが言った。

「あ——どうしてソックスが必要なんだ？」

「その中に包まっている物が必要なんだ。フェリックス フェリシスだ。君たちとジニーとで飲んでくれ。ジニーに、僕からのさよならを伝えてくれ。もう行かなきゃ。ダンブルドアが待ってる——」

「だめよ！」

ロンが、畏敬の念に打たれたような顔で、靴下の中から小さな金色の葉が入った瓶を取り出したとき、ハーマイオニーが言った。

「私たちはいない。あなたが飲んで。これ

halt where Ron and Hermione sat, looking stunned.

“I’ve got to be quick,” Harry panted. “Dumbledore thinks I’m getting my Invisibility Cloak. Listen. ...”

Quickly he told them where he was going and why. He did not pause either for Hermione’s gasps of horror or for Ron’s hasty questions; they could work out the finer details for themselves later.

“... so you see what this means?” Harry finished at a gallop. “Dumbledore won’t be here tonight, so Malfoy’s going to have another clear shot at whatever he’s up to. *No, listen to me!*” he hissed angrily, as both Ron and Hermione showed every sign of interrupting. “I know it was Malfoy celebrating in the Room of Requirement. Here —” He shoved the Marauder’s Map into Hermione’s hands. “You’ve got to watch him and you’ve got to watch Snape too. Use anyone else who you can rustle up from the D.A., Hermione, those contact Galleons will still work, right? Dumbledore says he’s put extra protection in the school, but if Snape’s involved, he’ll know what Dumbledore’s protection is, and how to avoid it — but he won’t be expecting you lot to be on the watch, will he?”

“Harry —” began Hermione, her eyes huge with fear.

“I haven’t got time to argue,” said Harry curtly. “Take this as well —”

He thrust the socks into Ron’s hands.

“Thanks,” said Ron. “Er — why do I need socks?”

“You need what’s wrapped in them, it’s the Felix Felicis. Share it between yourselves and

から何があるかわからないでしょう？」
「僕は大丈夫だ。ダンブルドアと一緒にだから」ハリーが言った。
「僕は、きみたちが無事だと思っていたんだ……そんな顔しないで、ハーマイオニー。あとでまた会おう……」
ハーマイオニーなら何とかしてくれる……ハーマイオニーなら何とか……。そして、ハリーはその場を離れて肖像画の穴をくぐり、正面玄関へと急いだ。ダンブルドアは玄関の櫛の扉の脇で待っていた。
ハリーが息せき切って、脇腹を押さえながら、石段の最上段に滑り込むと、ダンブルドアが振り向いた。
「『マント』を着てくれるかの」ダンブルドアはそう言うと、ハリーがマントをかぶるのを待った。
「よろしい。では参ろうか」
ダンブルドアはすぐさま石段を下りはじめた。
夏の夕風に、ダンブルドアの旅行マントはちらりとも動かなかった。
ハリーは「透明マント」に隠れ、並んで急ぎながらまだ息を弾ませ、かなり汗をかいていた。
「でも、先生、先生が出ていくところを見たら、みんなはどう思うでしょう？」
ハリーは、マルフォイとスネイプのことを考えながら聞いた。
「わしが、ホグズミードに一杯飲みに行ったと思うじゃろう」
ダンブルドアは気軽に言った。
「ときどきわしは、ロスメルタの得意客になるし、さもないとホグズヘッドに行くのじゃ……もしくは、そのように見えるのじゃ。本当の目的地を隠すには、それがいちばんの方法なのじゃよ」
黄昏の薄明かりの中を、二人は馬車道を歩いた。
草いきれ、湖の水の匂い、ハグリッドの小屋からの薪の煙の匂いがあたりを満たしていた。
これから危険な、恐ろしいものに向かっていくことなど、信じられなかった。

Ginny too. Say good-bye to her for me. I'd better go, Dumbledore's waiting —”

“No!” said Hermione, as Ron unwrapped the tiny little bottle of golden potion, looking awestruck. “We don't want it, you take it, who knows what you're going to be facing?”

“I'll be fine, I'll be with Dumbledore,” said Harry. “I want to know you lot are okay. ... Don't look like that, Hermione, I'll see you later. ...”

And he was off, hurrying back through the portrait hole and toward the entrance hall.

Dumbledore was waiting beside the oaken front doors. He turned as Harry came skidding out onto the topmost stone step, panting hard, a searing stitch in his side.

“I would like you to wear your cloak, please,” said Dumbledore, and he waited until Harry had thrown it on before saying, “Very good. Shall we go?”

Dumbledore set off at once down the stone steps, his own traveling cloak barely stirring in the still summer air. Harry hurried alongside him under the Invisibility Cloak, still panting and sweating rather a lot.

“But what will people think when they see you leaving, Professor?” Harry asked, his mind on Malfoy and Snape.

“That I am off into Hogsmeade for a drink,” said Dumbledore lightly. “I sometimes offer Rosmerta my custom, or else visit the Hog's Head ... or I appear to. It is as good a way as any of disguising one's true destination.”

They made their way down the drive in the gathering twilight. The air was full of the smells of warm grass, lake water, and wood

「先生」馬車道が尽きるところに校門が見えてきたとき、ハリーがそっと聞いた。

「『姿現わし』するのですか？」

「そうじゃ」ダンブルドアが言った。

「きみはもう、できるのじゃったな？」

「ええ」ハリーが言った。

「でも、まだ免許状をもらっていません」

正直に話すのがいちばんいいと思った。

目的地から二百キロも離れたところに現れて、すべてが台無しになったら「心配ない」ダンブルドアが言った。「わしがまた介助しようぞ」

校門を出ると、二人は人気のない夕暮れの道を、ホグズミードに向かった。

道々、夕闇が急速に濃くなり、ハイストリート通りに着いたときには、とっぷりと暮れていた。

店の二階の窓々から、チラチラと灯りが見える。

「三本の箒」に近づいたとき、騒々しい喚き声が聞こえてきた。

「――出ておいき！」

マダム ロスメルタが、むさくるしい魔法使いを押し出しながら叫んだ。

「あら、アルバス、こんばんは……遅いおでかけね……」

「こんばんは、ロスメルタ、ご機嫌よう……すまぬが、ホグズ ヘッドに行くところじゃ……悪く思わんでくだされ。今夜は少し静かなところに行きたい気分でのう……」

ほどなく二人は、横道に入った。

風もないのに、ホグズ ヘッドの看板がキーキーと小さく軋んでいた。

「三本の箒」と対照的に、このパブはまったく空っぽのようだった。

「中に入る必要はなかろう」ダンブルドアは、あたりを見回して呟いた。

「我々が消えるのを、誰にも目撃されないかぎり……さあ、ハリー、片手をわしの腕に置くがよい。強く握る必要はないぞ。きみを導くだけじゃからのう。三つ数えて――いち……に……さん……」

ハリーは回転した。

たちまち、太いゴム管の中に押し込められているような、嫌な感覚に襲われた。息ができ

smoke from Hagrid's cabin. It was difficult to believe that they were heading for anything dangerous or frightening.

“Professor,” said Harry quietly, as the gates at the bottom of the drive came into view, “will we be Apparating?”

“Yes,” said Dumbledore. “You can Apparate now, I believe?”

“Yes,” said Harry, “but I haven't got a license.”

He felt it best to be honest; what if he spoiled everything by turning up a hundred miles from where he was supposed to go?

“No matter,” said Dumbledore, “I can assist you again.”

They turned out of the gates into the twilit, deserted lane to Hogsmeade. Darkness descended fast as they walked, and by the time they reached the High Street night was falling in earnest. Lights twinkled from windows over shops and as they neared the Three Broomsticks they heard raucous shouting.

“— and stay out!” shouted Madam Rosmerta, forcibly ejecting a grubby-looking wizard. “Oh, hello, Albus ... You're out late ...”

“Good evening, Rosmerta, good evening ... forgive me, I'm off to the Hog's Head. ... No offense, but I feel like a quieter atmosphere tonight. ...”

A minute later they turned the corner into the side street where the Hog's Head's sign creaked a little, though there was no breeze. In contrast to the Three Broomsticks, the pub appeared to be completely empty.

“It will not be necessary for us to enter,”

ない。

体中のありとあらゆる部分が、我慢できないほどに圧縮され、そして、窒息すると思ったその瞬間、見えないバンドがはちぎれたようだった。

ハリーは冷たい暗闇の中に立ち、胸一杯に新鮮な潮風を吸い込んでいた。

muttered Dumbledore, glancing around. “As long as nobody sees us go ... now place your hand upon my arm, Harry. There is no need to grip too hard, I am merely guiding you. On the count of three ... One ... two ... three ...”

Harry turned. At once, there was that horrible sensation that he was being squeezed through a thick rubber tube; he could not draw breath, every part of him was being compressed almost past endurance and then, just when he thought he must suffocate, the invisible bands seemed to burst open, and he was standing in cool darkness, breathing in lungfuls of fresh, salty air.